

特集

アフガニスタン戦争



インタビュー

中村 哲

難民を出さない 努力こそ必要

「米国対タリバン」という対決の構図によって攻撃されているのは、昨年春からの大干ばつで貧困と飢餓にあえぐアフガニスタンの人々だ。餓死線上にある二〇〇万人の人々を救うために、私たちができることは何か。

なむら・てつ 一九四六年生まれ。一九八四年以来パキスタン・ペシャワールを拠点にハンセン病とアフガン難民の診療に従事。NGOペシャワール会現地代表。

ペシャワール会の活動

九月二日の米国同時テロへの「報復」として、アメリカはビンラーデン氏を匿っているときれるタリバンを攻撃する空爆を開始しました。欧米、日本のメディアでは、アフガンIIテロ掃蕩の地という定型句が氾濫しています。中村さんは長い間現地で活動をされ、アフガニスタンの人々の現実を見てこられたわけですね。

中村 私たちペシャワール会は、一九八四年からパキスタン、アフガニスタンで医療活動を行っています。ペシャワールはパキスタン北西辺境州の州都で、ここに敷地が二〇〇〇坪、建坪一〇〇〇坪、地下一階地上二階の基地病院を持っています。現在パキスタンのコーヒスタンとラシクトという山

岳地方に二つ診療所があります。アフガン側には、一〇年前からいずれも山岳地方ですが、三カ所、ダラエ・ヌール溪谷、ダラエ・ビーチ溪谷、ワマ溪谷に診療所があります。われわれは基本的に人の行かないところに行こう、こういう山岳地帯は欧米のNGOも行かない、二重に見捨てられているところこそ重点的に行こうと考えています。

首都カブールにはこの三月から臨時診療所を五カ所設けました。全体で病院が一つ、パキスタンに二つ、アフガニスタンに五つの診療所、全部で八カ所のクリニックを持っています。カブールは従来は欧米のNGOが殺到していたところなのですが、昨年一〇月の米戦艦爆破事件の疑いから、今年二月国連の制裁が行われ、次々と撤退していく。カブールは首

都ですから一〇〇万から二〇〇万の人がいますが、彼らの多くは都市難民で、もはや巨大な難民キャンプと化しています。もともとのカブール市民は二、三割しかいません。知識層、富裕層は国外に出て欧米やオーストラリアに行っている。残ったのは貧民層、そこが無医地区になってしまったのです。

従来年間に二〇万人の診療数でしたが、今年は臨時診療所が増えたため二五万から三〇万の診療数でした。現地スタッフは二二〇人、パキスタン人、アフガン人両方、日本人は四、五名です。

本来の医療活動に加えて、昨年から井戸掘りを進めています。二、三年前から、アフガニスタンのみならず、パキスタン、イラン・イラク北部、モンゴルなどユーラシア大陸のさまざまな地域にわたる大干ばつが深刻な状況になっていきます。そのために人々が離村して難民化し、水欠乏で食器などが汚染され、感染症で多くの子どもが死ぬという事態です。

これに対して私たちは、二〇〇〇年七月から一年で六〇〇を目標として、井戸掘り、またカレーズの修復をやってきました。その作業員・監督全員アフガン人七〇〇名、日本人は二人の責任者と三人のボランティアがいます。

九月一日の米国テロの時、私は干ばつと飢餓に備えるため、診療所をいまの倍の一〇カ所、水源作業地を一〇〇〇カ所に増やそうという準備のためにカブールにいました。空爆を知って、絶望的な思いがしました。いまのやり方で

はテロが増えるばかりだと思えます。弱く小さな国を世界中の大国が寄ってたかって弱いものいじめでしかない。

——アフガニスタンの実状について、私たちはほとんど知りません。非常に他言語・多民族であり、内戦の要因として民族が関わっていると言われます。タリバンの主体はパシュトン人であるとか、北部同盟は寄合所帯だと報道されますが、民族間の緊張は日常的なものなのでしょうか。ペシャワール会の現地スタッフの間ではどのような状態ですか？

中村 ペシャワール会のスタッフは、半分近くがパシュトンですが、ペルシャ語を話すタジク人、ハザラ人もトルコマン、クンドゥズもいますし、ほとんどすべての民族がいます。アフガニスタンの縮図のようなものです。しかしマスコミが報道するほど、民族分派主義は強くない。まがりなりにも「アフガニスタン」という同一性が確立されていると思います。特にクンドゥズ地方などはパシュト人は少ないので、北部同盟対パシュトの連合という図式は成り立ちません。

——日本を含め、国際社会のタリバンに対する視線はたいへん厳しいものです。国連安保理はテロ支援を理由に経済制裁を行っていますし、さらに日本でも多くの人々がタリバンを認知したのは、バーミヤンの石仏破壊でした。

中村 一年半前からWHOや国連機関が大干ばつを訴え続けてきましたが、国際社会は耳を貸してこなかった。語弊がありますが、この干ばつの影響による飢餓は、報復爆撃よりも大きなアクションを必要としているのです。しかも困って



現地の掘り井戸

いるところから今年の一月から国連制裁を受けています。この干ばつや飢餓の事情が世界に知られて救援が駆けつけるといふ希望を抱いて、われわれは干ばつ対策に必死で取り組んでいたのです。ところがやってきたのは制裁、そのあとで大仏破壊。彼らにとってみれば弱り果てて助けを求めているところ

ろにがつんとやられ、行き場を失ったという思いではないか。私は八四年からアフガニスタンに入っていますから、タリバンより古いですよ(笑)。その間いろいろな権力の変遷を見ているんですが、タリバンはいちばん血なまぐさくないのです。彼らが勢力を拡大していくのもほとんど政治交渉によってなのです。地域のジルガ(長老会議)が彼らを受け入れるべきか否か話し合う、そこに政治的圧力をかけてから進駐していく。実際に命を落とすような犠牲者は少なかったですね。ソ連が崩壊したあと、一九九二年の暫定政権、ムジャヒデ

ーン連合政権成立直後の無政府状態は、たいへんひどいものでした。カブール市内が破壊されたのもその時のことなのです。市街戦はある、略奪、婦女暴行はある、まともに外を歩くこともできません。二万人の市民が死んだといわれています。われわれも自動車が強奪されたり、診療所を襲撃されたり、われわれ自身が武装していなくてはならないような状態でした。

九六年にカブールがタリバンに占領されますが、このひどい状態を取り除いてくれたのがタリバンだった。主だった犯罪は消えましたし、それはウソみたいでしたよ。あの時タリバンがナジブラ大統領を殺して吊さなければ、ずいぶんイメージが変わったのではないか。

タリバンは次々と厳しい布告を出して宗教的な戒律を強制しますね。中には荒唐無稽なものもありますが、その多くは、是非は別として、農村部や一般の下層市民の間では普通に行われていた慣習に近いものです。西洋化・近代化した富裕層にはきゅうくつで受け入れがたかったかもしれないませんが、多くの人々にとってはごくなじみ深いものだと思います。イスラム主義を掲げているわけですから、行き過ぎた西洋化に歯止めをかけようとする面はあったでしょう。私が見ているのも、日本人でも眉をひそめるようなビデオが出回ったりしていたから、タリバンとしては道徳的な面もきちんと是正していかうとしたのでしょう。だから人々がほっとした、それで各地域でタリバンを受け入れたのだと思います。そうで

なければ、たった一万五〇〇〇人で、ソ連の一〇万からの大軍でも制圧できなかったアフガニスタンの九割近くを掌握することはできなかつたのではないのでしょうか。

情報をコントロールされているのは日本

現地の人々は今回のテロについて、どれほど知っているのでしょうか。

中村 非常に大きな誤解があるのですが、アフガニスタンの人々は日本やアメリカの人間よりもはるかにバランスのとれた情報を持っているのです。というのは各家庭にラジオはあるんですね。彼らはそれでBBCのパシトゥー語放送を聞いているから、西欧でどういうことが言われているかちゃんと知っているし、アフガニスタンの状況は自分のことですから当然わかっています。私が事件のことを知ったのもアフガニスタンの地元の人間からです。むしろ日本の方が情報をコントロールされているのではないか。

日本でも、タリバンが厳しい言論統制を敷いて人々を無知なままに置いている、という報道が非常に多いですね。私に言わせれば逆で、日本の方が何も知らない。

——非常に倒錯した出来事ですが、米英は、この空爆がテロリストが標的であって、一般市民ではないということを示すためと称して、食糧を投下しています。

中村 これは二重に恥の上塗りとも言うべきことですね。片や爆弾を落とす、片や人道主義的なポーズを取るといって行

為は、道義的に見ても大いに疑問です。そしてまた、同じ食糧を投下するにしても、現地に何が合っているか、必要とされているかを考えるべきではないですか？

現地から入った報告によると、みな不気味に思っただけで、多くの場合タリバン兵士が集めて焼いているそうです。何が入っているかわからない、と地域住民が自発的に焼いたケースもあると聞いています。地元の都合を二重に考慮していないと思います。

日本は日本の自主的な立場に立って、正しい情報を収集するべきです。とにかくこれまでかたよったところからしか情報が入っていないのです。例えば、日本にはマスードのファンが多いですよ。北部同盟に取材に行くと、マスードに会って、その地域の住民に話を聞けばタリバンを批判するに決まっています。その上で国連機に便乗してタリバン高官と会見する。しかし、マスードの声が全アフガニスタンを代表しているわけではないのです。

国連が匿っていたナジブラ大統領を殺したのですから、国連にとってもタリバンは敵です。また、タリバンの高官に女性のブルカについてどう思うかと聞いたら、当然彼らは「被らなければだめだ」と言うでしょう。そうした断片的な情報から、単に彼らを反動的な恐怖政治と決めつけてきた。「現地取材」といっても、実際に現地の人々の中に入って、彼らの生活を知り、声を聞いてきた人は少ないのです。もちろんアフガニスタンは多民族併存地域ですが、やはりパシトゥー

が主流ではあるのに、その多数派の声がなぜか伝えられてこなかったのが現実ですね。

私がこんなことを言うとき「あなたはタリバン派ですか？」(笑)と、すぐ烙印を押そうとする。私の本を出している石風社にも嫌がらせの電話が入ったそうです。

タリバンにも本音と建前がある。表向き言わざるを得ないことと現実の対応は違います。例えば、ある日本の映画会社が一カ月アフガニスタンにとどまって取材をしました。タリバンはビデオカメラを禁じていますから、ましてや映画カメラでの撮影などんでもないことですね。ところが現実にはそれができる社会なのです。

餓死者を出さないために

——アフガニスタンは、先の見えない空爆、事実上の戦争状態に巻き込まれてしまいました。ペンシャール会は、具体的にどのような活動をしていくのですか。

中村 私たちは決して目立たず、アフガニスタンの人々の間にとけこんでいますから、事実上水面下でアフガニスタン東部を駆け回るのは自由自在なのです(笑)。いま最も厳しい現実としてあるのは飢餓です。これはある意味で戦争より恐ろしいことです。カブール市民はひしひしとそれを感じています。カブールの人口百数十万のうち、約一割は生きて冬を越せないのではないかと。

さらに不気味な事態ですが、彼らが難民化してどんどん流

フガン内部の援助に真面目ではなかったと思います。タリバンへの反感があつて、そのうち彼らが倒れるだろうと思つていたのか、サボタージュしていたとしか考えられないこともあります。

例えば井戸を掘つたというある団体ですが、その後住民がどうもその井戸は水が出ないから再生してくれと頼んできた。私たちが行ってポンプをどけてみると、いかにも井戸らしく作つてあるけれど、まったく掘つていなかったのですよ。水が出ないのも当たり前です。

どこそこクリニックを建てたというから行ってみると、立派な建物だけ、人は誰もいない。いつまでたつても人は来ない、そのうち牛小屋になったとか。

そういうことがまればなく、ごく普通と言つていくくらい起こつていたのです。売名的というか、業績を上げればいいと言つて考へ方。ある団体は一〇〇〇万円を井戸を二〇本掘つたと言いつつ、現実にはポンプを送つただけ。しかしポンプのセットは一本一万八〇〇〇円ですから、二〇本だと三十六万円でしょう。日本人は国連が好きですから、私が偏見を持つていふと思われのですが、国連組織によつては、九割が職員の給料で、その他事務所の家賃、コンピュータ、ジュネーブへの旅費を差し引くと、この計算もうなずけますが。タリバンでなくなつて、誰が見ても憤ることがたくさんあったのです。

われわれの場合、九五、六%が実際に援助として届きま

出してくる情景を想定して、百数十の人道援助団体がペンシャールの国境地域で手ぐすね引いて待っているのです。彼らは人道援助の「プロ」、それで食っている人たちです。私に言わせればそれこそ非人道的です。自分たちで難民を作つておいてその難民を援助する、これが国際社会の図式なのです。私たちは難民を出さない努力こそが必要だと思つて、井戸掘りなんかをやつてきた。しかし、こういう状況になつてくると、飢餓、餓死そのものが問題になつてきます。生命の危機にある、難民にもなれない人たち、約一〇%の人たちのために食糧援助を始めました。そのためについたといくら必要かという点、一家族一〇人として一カ月間二〇〇〇円なのです。一冬三カ月六〇〇〇円で一〇人家族の命が助かるのです。一大家族、一〇万人を助けるのにわずか六〇〇〇万円、マンション一つ分にもならないお金で、これだけの人間が救えるのです。

ではこれをどうやって配るかですが、ほんとうに必要な人々に分配するノウハウを私たちは持っています。アフガン社会の現実の権力は、各地域のジルガにあります。このジルガと安全性を保つために地域の行政組織、それに私たちペンシャール会の三者で話し合うのです。どこそこの誰が困っているという、ジルガを通して伝わってくる情報に基づいていけば、実際に困つた人々に確実に援助が届けられます。まず餓死者を出さない、それがいまの活動目的です。

この一年を公平に見てきて、国連組織、WFPを含めてア

す。一億円という少ないようですが、国連を含めた他組織に二〇億円供与するのとはほぼ同じ仕事ができるわけです(笑)。コスト・パフォーマンスは非常に高いです。

——日本政府、また私たちにできるのはどういうことでしょうか。

日本は憲法九条を前面に押し出すべきです。「私たちは憲法によつて今回の戦争に参加することはできません」とはっきり言えなければいけません。それで日米関係が悪化して経済的に不利益を被つて、多少貧しくなつたとしてもいいと、私は思います。

私は、一〇月一三日の衆議院テロ対策特別委員会に参考人として呼ばれましたが、そこでも発言したように「自衛隊派遣は有害無益」だと考えています。

(聞き手 編集部・中本直子)

アフガン「いのちの基金」

緊急支援「新たな難民をつくらないうために」

期間…二〇〇一年一〇月から四カ月間。

予算…家族(一〇名)あたり三カ月分、約五、五七五万円

目標額…今後の事業拡大を含めて一億円。

寄付金振込先:

郵便振替口座番号〇一七九〇一七一一六五五九

加入者名 ペンシャール会

*通信欄に「いのちの基金」とお書き下さい。